



2013年春、草木は正に青々と茂り、律動が平原を満たす。希望を象徴する季節に、「埔里 Butterfly 交響楽団」はさなぎから蝶々に孵化し、小鎮に文化の精神を育もうと、舞い上がって旋律を奏でる。

1. 音楽家の感動と再考

1999年の921地震後、音楽家たちは相前後して埔里^註に入り、音楽で被災地の心を慰め、子供たちが感情の出口を見つける手助けをした。台北の指揮者で楽団団長である謝東昇さんもその一人であった。

元々埔里ではオーケストラ演奏者は少なかったが、地震後は完全にいなくなった。そのため、埔里の愛蘭小学校でオーケストラ楽団を創立するために招かれた謝東昇は、北部と中部を往復する日々を始めることになった。このことは、1人の音楽家の仕事というに留まらず、彼の人生に感じるものと考え直す機会をもたらしたのである。

「台北では、音楽を学ぶことは決して珍しくない。いわば流行りの高尚事で、その親たちの多くは医学界や高い社会経済地位をもつ人である。私たちはただ教えることに専念すれば良かった。」と謝東昇さんは振り返る。埔里に来て初めて様々な生徒たちの親に出会った。農民、臨時工、清掃員、雑貨屋の店主……大部分が経済的には余裕ないが、子供の音楽教育への熱意は都会人に比べて決して負けていない、むしろそれ以上に熱心だ。



震災後埔里に駆けつけた謝東昇さん。(陳振堂攝)

実際のところ、都市と農村のギャップは大きく、音楽環境は貧弱だ。謝東昇さんは教えるだけでなく、貧しいが才能のある子どもたちのためにスポンサーを探すことも必要だった。家が破産した両親に従って借金取りからあちこち逃れ、学習を中断していた生徒がいた。子供の才能を埋没させないため、妻の劉妙紋さんと子供を自分のところに長期に引き取って育成もしたこともある。

こうした状況は台北ではほとんどない。謝東昇さんの気持ちはいつの間にか変化し、地元を目線で埔里の音楽教育を考えるようになった。その後、魚池郷^註の三育神学院から教員招聘を受けた時、しばらく考えた結果、彼は毅然として家族全員で埔里に引っ越したのだ。流浪的な性格と自認するが、彼自身が何らかの変化を求めたのだ：「クラシック音楽はただ精緻であればいいのではない。音楽の学習も公演もただ輝かしいホールにだけあるのではない。いかにしてクラシック音楽をもっと多くの人の身近に届けるか、普通の人でも鑑賞できるものにするか、このことが更に重要なのです。」

「もしも台北に残っていれば、もっと多くの収入が期待できたでしょう。しかしここにくれば、音楽が好きなお子たちに多くの道を見つけてあげられるのです。」

こうして、彼は埔里の管弦楽教育に深くかかわるようになったのである。

2. 埔里で音楽の肥沃な土地を耕す

一方、新故郷文教基金会^註は2011年に生態の町づくりを推進するため、文化芸術活動を通して、埔里蝶々王国復興の概念^註を住民へ伝達したいと考えた。ペーパードーム^註の子供合唱団団長の陳致平先生の協力で、2012年9月子供ミュージカル「3匹の毛虫、世間を渡る」を上演した。

新故郷文教基金会は大埔里地区^註の管弦楽界の優れた教師や学生を特別招待して、組織を越えた「Butterfly オーケストラ」を編成し、現場の伴奏を担当してもらった。謝東昇さんが舞台監督、劉妙紋さんが指揮を担当した。これは埔里音楽界では得難い夢のマッチングとなり、そして熱烈な反響を巻き起こした。



子供ミュージカル「3匹の毛虫、世間を渡る」

この上演のきっかけは、新故郷文教基金会理事長の廖嘉展さん、大埔里地区観光発展会の会員、そして地元の発展に関心を持つ人たちが、「埔里はこれまで芸術の町、文化の都といわれてきたが、さらに町の質を高めるにはどうすればいいか？ 芸術や文学の特質を生かし、もっと社会貢献するにはどうすればいいか？」と考えた結果である。

子供のミュージカル「3匹の毛虫、世間を渡る」の成功、特に「Butterfly 管弦楽団」の高水準な演奏は、埔里の管弦楽界の実力を人々に印象付けた。

「もし埔里に交響楽団があって、クラシック音楽が大衆に入り、人々の生活を幸せにする

ことができれば、どんなにすばらしい事だろう！」廖嘉展さんや仲間たちは思った。

震災後 10 数年を経て、音楽を学ぶ子供も次第に成長した。彼らの専門能力を継続して高めるにはどうすればいいか？能力を発揮できる舞台をいかにして提供するか？ これらが新しい課題になっていた。

こうして、「埔里 Butterfly 交響楽団」は設立に向け動き出した。埔里の音楽環境を整え、高校、大学、社会人の音楽家の卵たちに専門家養成の機会を与え、優秀な音楽家を迎え授業も行いたい。この楽団がそうした夢を実践する舞台となり、新しい地域の魅力やビジョンを発信することを期待した。



「音楽家は蝶々に似ている」と語る廖嘉展さん。

4 月 29 日暨大付属中学で「埔里 Butterfly 交響楽団」の発起人会議が行われた。暨南大学^註の蘇玉竜学長が団務委員会の召集人を勤め、大埔里地区観光発展理事長の茆晉祥さんが賛助委員会の召集人を担任する。そして、廖嘉展さんが団長、謝東昇さんが音楽総監督……と、力不足と自認しながらも前に向かって進もうとする人たちだ。埔里を代表するシンボルの一つ蝶々を団名にした。さなぎから脱皮して、地域の誇りをもって翼を広げ、高く舞い上がってほしいとの願いを込めた。

この楽団はプロの音楽家をはじめ、才能のある新鋭や実習団員が揃っているが、組織運営及び人材養成には、社会からの支持が絶対必要で、熱意ある企業の賛助のほか、埔里鎮の住民の理解や小額寄付が、楽団の持続的な成長のキーとなる。

楽団の運営は社会企業の理念のもとで出発したと語る廖嘉展さんは、「一方で人材を育成し、他方で公益的な慈善公演に参加し、さらに各級の学校の楽団が根付くように支援しています」という。音楽を学ぶ子供に「帰属できる」、「寄港できる」場所を提供し、一方で彼らの専門能力を住民たちやコミュニティへフィードバックしてもらおうということだ。

さらに廖嘉展さんは、音楽家は蝶々に似ていると語る。「もし私たちが良い生息環境を築けば、生まれた蝶々は安んじて成長できる。そうなれば、すでに飛び出した蝶も再び帰って来るし、さらにより多くの貴重な蝶々がやってくるようになります。」

3. 巨人の肩の上に立って琴を引く

「埔里に交響楽団を創立するなんて思いもしなかった、私たちの子供はとても幸運です！」埔里鎮の住民の王栄興さんはこう言う。

王栄興さんの二人のお子さんの王力雯と王力喆が相前後して謝東昇に師事してバイオリンを習い、現在共に埔里 Butterfly 交響楽団の実習団員に選ばれた。「921 地震以前は、子供がバイオリンを学ぶ場合、田舎に来て教えてくれる先生がいなかったため、台中にまで送り出さねばならなかったのです。」と王栄興さんは回想する。これは埔里の父兄たちが共通して直面する問題であった。

園芸の仕事に従事する王栄興さんは、幼少から音楽が好きだったが、家の環境が許さなかった。今は自分の子供が興味と才能を持っていれば、家計にゆとりはないが、「子供たちが

学びたいのであれば、私は田を売り、家を売ってでも彼らを行かせます！」彼は少年時代の音楽の夢を子供に託したいのである。

視野も広く定見もある父は、音楽の砂漠時期を経験したことから、今訪れたこのチャンスを大切にしたいと考えている。「埔里 Butterfly 交響楽団」の創立を知り、喜びに耐えなかった。地元では異なる音楽グループが独立して活動し、統合しにくいことをよく知っていた王榮興さんは、「廖理事長は積極的に多方面と協力し、公共性と公益性を合わせ持った楽団を作り出した。これは地元にとって幸せなことです。」と敬服し、感無量といったところだ。

子供たちはまだ駆け出し段階だが、既に楽団の力量や魅力を感じている。

「台中 2 中」音楽クラスで勉強していた鍾璟楸さんは、学校で練習する時には同世代のレベルに違いを感じなかったが、交響楽団にきて専門の先生に教わると、1 段階上の全く異なったレベルを実感した。

王力喆さんも楽団の先生や大先輩に新たな世界へ導いてもらったように感じる。「見たことがない技法、聞いたことがない解釈の方法は本当にすごくて、私も努力して学びたい！」彼は興奮気味で言う。

謝東昇さんはこれらの子供を「巨人の肩の上で琴を弾くがごとし」と形容する。正に楽団の音楽教育伝承だといえる。



4. 「Puli、Puli」 鳴り響くのを期待する

力不足と思いながら出発し、皆が全力で取り組んできた。「もしいつの日か、私たちが国家レベル、さらに世界レベルの傑出した音楽家を育成し、全世界が埔里に目を向けてくれたら、それは小鎮の住民すべての誉れでしょう。」廖嘉展さんは将来に期待する。

謝東昇さんは音楽家の夢を描く。世界の有名な都市や国家には代表的な曲があって、広く伝わっている。例えばドヴォルザークが米国のために作った「American」は後世に伝わる。パウル・リンケがベルリンのために作曲した「Berliner Luft」はベルリンの気質を表現している。ブロードウェイ歌劇「New York、New York」はニューヨークの魅力を深める…「で

は、私たちの『Puli、Puli』はどこに？」と謝東昇さんは自問している。

もちろん今書くことはできない。「しかし、もし5年、10年後に埔里 Butterfly 交響楽団が蝶々のように脱皮して成長すれば、私はこの歌が必ず誕生すると信じます！」

少し未来を想像してください。私たちの土地で、Butterfly 交響楽団の子弟たちが住民のために優れた楽章を創作し、公演するたびに「Puli、Puli」とアンコール曲が聞こえ、歌い続けられる……それは何と輝かしい光栄だろう！

(本稿は、facebook の埔里 Butterfly 交響楽団の基本データを、管理者の承諾を得て被災地市民交流会が翻訳したものです。)

埔里 Butterfly 交響楽団の概要

設立 2013年4月29日

メンバー 首席団員 20歳以上のプロ演奏者。

正団員 16歳以上の音楽学科学生、または同等演奏能力を持つ人。

実習団員 10歳以上の学生、または協奏曲の演奏能力を備える人。

協演者 18歳以上のプロ演奏者。

設立地 南投縣埔里鎮

現在地 南投水沙連地區

Butterfly 問い合わせセンター

電話:886 - 49-2980726 FAX:886 - 49-2989295 メール:butterfly1234555@gmail.com

訳注

埔里 南投県の山間部にある人口8万余の鎮(町)で、台湾本島の地理的な中心に位置する。隣接する國姓、魚池、仁愛など四つの郷の中心機能を担っている。1999年に発生した921大震災で大きな被害を受けた。

魚池郷 埔里鎮の南に接する郷。ここには台湾を代表する観光地・日月潭がある。

新故郷文教基金会 1999年震災の半年前に埔里で旗揚げしたまちづくりのNGOで、震災復興に尽力した。特に、埔里鎮の桃米村に支援に入り、生態を活用した復興まちづくりを成功に導いた。

ペーパードーム 阪神・淡路大震災の被災地と市民交流を続けてきた新故郷文教基金会が、神戸の震災の記念的建物であるペーパードームを台湾の被災地(桃米村)に移設した。今は一つの観光・交流エリアとなっている。

埔里蝶々王国復興の概念 かつて埔里は多くの蝶々が生息する地として知られていたが、もう一度蝶々王国を復興させようと様々な取組みを展開している。

暨南大学 国立暨南国際大学。埔里の市街地に隣接して立地する総合大学で、学生数約5,800人。